

理の発見に理性が関与するとするキリスト教ユナニスムの伝統と対立する。この派にとっては神の存在も魂の不滅性も哲学に属するからである。かれはまたトマス派の伝統²⁾とも対立するといえよう。トマス派は思弁神学を用い、聖書から出発しながら、聖書にその直接の解決を見出せない問題の探求はすべて理性の助けを借りて組み立てる。パスカルにとっては、ベリユールやアウグスティヌスの伝統の支持者すべてにとってと同様、実証神学しか存在しない。神学者はみずから提起する問題の解決を聖書と伝統の代表たる教父たちの著作の中に求めるだけで満足せねばなるまい。それ以外のテキストによって確かめることができないこの種のテキストを出発点とする思弁は無益かつ無謀である。そこで、パスカルは非常に細心に権威の権限と理性の権限との境界を定める。

パスカルが理性による認識よりも信仰的認識のほうが優るとははっきり断言しているからといって、そのことからかれが理性に全く価値を認めていないと結論づけてはなるまい。理性はそれ自体が最高権威となる固有の領域を持っているからである。ふたつの領域の境界を明確にしておけば、これら二種類の認識の衝突から生じかねない論争を回避することができる。

感覚あるいは推理の下にある問題についてはこれとは事情が異なる。ここでは権威は役に立たない。ただ理性のみがこの種の問題を認識することができる。

理性が支配するこの領域には、幾何学・代数学・音楽・物理学・医学・建築学が含まれる。パスカルはこのリストに「実験と推理に服するすべての学問」を付け加える。神学が問題となる場合には、暗黙のうちに権威と信仰が結び合わされていた。しかし、ここではパスカルは躊躇なく実験と推理を近づける。このことから、デカルトとパスカルとでは理性の働きの理解に違いのあることがわかる。パスカルは、固有の原理のみに則って組み立てられる科学の先験的構成に対して、推理によって得られた結果を実験的データと絶えずつきあわせねばならないとする。この考え方に沿って、か

れは『パンセ』の分類済み綴りの第一章となる人間学を練り上げることになる。問題は、人間に関する哲学を作り上げるのではなく、人間の条件のありのままを観察し、報告書を作成することなのである。

聖書や教父たちの権威に頼らざるを得ないため、神学においては新奇なものはすべて禁じられている。一方、実験と推理に基づく学問には前進が可能である。絶えず前進することはこの種の学問の本質ですらある。

自然の秘密は隠されている。自然は絶えず動いているが、われわれは常にその働きを見出せるわけではない。時代から時代へと流れる時間がそれを明らかにする。……

『真空論序論』第二部ではこの学問の前進というテーマが展開される。学問はいつまでも古代人を後見人とはせず、古代人の教えを土台にしてたゆみなく前進していく。

神学や何らかの権威に基づく学問に対するときにはアウグスティヌス主義者であるパスカルも、科学的認識の問題に関しては、認識を理性の行使に基づくとするトマス派アリストテレス主義者の伝統にむしろ近い。だからといって、二つの伝統に同時に立脚すること自体には何ら矛盾はない。それに伴う困難はそれぞれの方法にふさわしい対象を選ぶことで回避される。

理性と信仰の各領域の画定は、17世紀前半にはよく取り上げられたテーマである。デカルトは再三このテーマを取り上げたため、聖体におけるキリスト臨在のドグマを説明しない物理学を作ったとかれを非難する神学者たちにやむを得ず弁明せねばならなかった。『哲学原理』第一部の終わりで、デカルトは次のように述べている。

特に、われわれは神の啓示されたことはそれ以外のこととは比較にならないほど確実であることを絶対的な規則とみなそう。……しかし、神学に関わりのない真理については、哲学者たらんと欲する人なら自分でかくかくであると確認しなかったことを真理と受け取ることなどあり得ないであろう。

2) トマス派同様、キリスト教ユナニスムにとっては理性の役割は信仰の役割に先立つ。まず理解し、ついで信じるべきである。これに対し、アウグスティヌス派にとっては信仰が第一、理性による理解はそのあとと決まっている。「知らんがためにわれ信ず」